

高知県四万十町における地方移住の定住要因分析と 価値共創による定住率向上に向けての具体的提案

高知工科大学大学院 起業マネジメントコース
1215102 浦島 卓也

論文要旨

第1章 序論

近年、東京一極集中の現状から地方への移住定住促進が国・各地方自治体を主体として行われている。年々、地方移住者の数は増加傾向にある。さらなる地方移住者獲得のため、全国の地方自治体では9,969件の移住支援制度を設けている。また、総務省では地方への定住・定着施策として「地域おこし協力隊」の制度を設けて地方移住の促進を行っている。ただ、定住・定着目的である地域おこし協力隊でも任期3年後の定住率は6割となっている。定着率を上げる政策である地域おこし協力隊ですら、このような状況のなか、自治体が行う移住支援策だけを頼りにした移住者はさらに厳しい定住率なのではないかと考えた。よって、本論文では地方移住における定住につながる定住要因を探り、定住要因から定住プロセスに至るモデルを提案したい。

第2章 先行研究調査

先行研究では移住定住に関する論文を調べたが、先行研究の領域は、従来の”住まいの確保””仕事の確保””コミュニティとの関係”の枠内であることがわかった。そして、それら課題としているものは、すべて移住要因となるものであり、長くその地域に暮らす(=定住する)要因の一部ではないかと考えた。

第3章 リサーチ・クエッション

リサーチクエッションとしては「どのような定住要因で移住者が定住を考えるのか。そして、定住プロセスに至る定住モデルを提示したい」と考える。本研究を進めるにあたり、全国的にも移住者受け入れに積極的であると知られている高知県四万十町を対象し、その四万十町に緑のふるさと協力隊や地域おこし協力隊などの移住定住支援を使わずに移住した移住者への聞き込み調査をもとに”定住要因”を明らかにし、定住プロセスへと至る定住モデルの提示を試みたい。

第4章 研究対象

研究対象としては、高知県下で移住促進に実績のある四万十町を取り上げることにした。四万十町には平成23年より405人の移住者を迎え入れている。四万十町としては、移住定住促進施策として短期のお試し滞在施設や移住支援住宅、中間管理住宅などの住宅支援や移住定住促進補助制度、地域おこし協力隊制度の活用を積極的に行い、移住定住の促進を図っている。

第5章 研究方法

研究方法としては、まず、四万十町に移住してきた5名と四万十町に移住したが定住に至らなかった1名をインタビューした。インタビュー内容としては、インタビュー対象者の方の【出身地】【家族構成】【移住動機】【四万十町への移住を決めた理由】【移住後の仕事】【移住後の住居】【地域住民との関わり】【定住の心配点・不安点】の聞き取りを行った。

そして、インタビューを行った内容を文化人類学の分野で川喜多二郎が考案した研究法（川喜多, 1967, 1986, 1971）であるKJ法にて分析を行うこととした。

第6章 インタビュー調査

インタビューからは、移住年数の短い方からは住居取得や農地取得、子育てに関する不安を感じている一方で移住年数の長い方からは短い方が感じている不安については聞かれなかった。移住年数の長い方は地域住民との関わりの中で不安を克服していったのではないかと考えた。

第7章 KJ法によるインタビュー分析

KJ法によるインタビュー分析として、まずインタビューから得たキーワードの抽出を行った。そして出したキーワードをグルーピングしていった。さらに、グルーピングしたものを図式化した。最後に文章化を行った。KJ法からは、最初は【移住条件】を意識することが多いが【移住課題】⇒【環境】⇒【自己実現】⇒【地域】というプロセスを踏むことにより、より長く移住した地域での生活を続けている(=定住する)人がいることがわかった

第8章 インタビュー分析からの考察

KJ法より得た【移住条件】⇒【移住課題】⇒【環境】⇒【自己実現】⇒【地域】というプロセスを先行研究『社会貢献動機づけとHRM』（芦原直哉、大手前大学論集、2010-03-31）で芦原が述べている「動機づけの二軸理論」をもって考察を行った。「動機づけの二軸理論」では、マズローの「欲求の5段階」やマクガレーの「X理論・Y理論」などの動機づけ理論を俯瞰的に考え、動機づけには

大きく二つの軸があると考えた。ひとつは内発的—外発的動機づけであり、他方は個人的—社会的誘因の軸である。この二軸によってできる四つの象限は、経済的欲求、社会的欲求、自己実現欲求、社会貢献欲求の四つの欲を位置づけることができるとしている。そして、芦原はこの動機づけの二軸理論をもって、個人的誘因と社会的誘因が交互に働いて欲求が段階的に高度化すると結論付けている。これを欲求段階のN仮説としている。

この動機づけの二軸理論による欲求段階のN仮説をもってKJ法にて得られた分析をもとに考察を行った。インタビューから移住者も最初は仕事や住居の確保など経済的欲求から始まるが社会貢献欲求へと向かうことにより、より長く移住先に移住した地域での生活を続けている(=定住する)ことになることがわかった。そして、考察を検証するため、もう一度詳細を一人に絞ってインタビューを行った。

第9章 定住プロセスの社会貢献欲求に至る定住モデルの提案

定住プロセスの社会貢献欲求に至る定住モデルの提案としてマーケティングで用いられる【価値共創モデル】を用いて移住者が各欲求を満たしていくために移住者と地域住民とで地域に価値を共創していく【定住モデル】を提案している。

第10章 結論・今後の課題

本研究からわかったことは、移住者は、動機づけの二軸理論による欲求段階のN仮説のとおり、移住者は経済的欲求、社会的欲求、自己実現欲求、社会貢献欲求を経ることにより、より長く移住した地域での生活が長くなる(=定住する)ことになることがわかった。そして、そのプロセスを段階的に経ることは、移住者と地域住民による地域を介した価値共創が必要であることを提案している。

今後の課題としては、インタビュー条件を厳しくしたため、インタビュー人数に制限されてしまった。今後、インタビューの対象者を広げ、多くのインタビューを行う必要があると考える。

以上